

第1回主潮社展出品作《降魔圖》にみる矢野橋村の革新 —色彩と写実の研究をめぐって—

谷岡彩（大阪大学）

矢野橋村（1890-1965）は、近代的な新しい南画を創造した画家である。文展などで活躍する一方、日本南画院など多くの美術団体を主導し、大阪美術学校を設立して校長として後進の育成に寄与した。大阪美術展覧会や大阪市美術協会に参加し、主潮社を設立するなど、大阪の文化芸術の発展にも貢献している。橋村の画風を概観すると、明治末期の習画期を経て、大正期は文展で入選を繰り返し、昭和3年（1928）の第9回帝展において《暮色蒼々》で特選を受けて画業のピークを迎えた。こうした画歴の中で重要な画風転換の契機となったのが、大正8年（1919）、9年開催の主潮社展覧会（主潮社展）である。橋村にとって主潮社展は、それまでできなかった「研究的態度」での制作成果の発表の場であったことが、自著から知れる。また、大正7年秋頃から後援者となる綿花商の西松三郎が大正10年春に没したため、自由な制作と発表ができたのは大正8年、9年の2年間であったとも述べ、同展の重要性は明らかである。しかし、先行研究には詳細な言及はなく、特に、実質的に第1回主潮社展となった大正8年「福岡青嵐矢野橋村第一回個人展覧會」の出品作は所在不明であったこともあり、等閑に付されてきた。

今回の発表では、調査で所在が明らかとなった《降魔圖》（八木商店本店資料館蔵）を中心に上げ、橋村が言う「研究的制作」について考察する。まず本図の概要を示し、次に本図で試行した色彩表現と写実的描写の研究について検討し、橋村の画業における本図の位置付けを行う。

本図は縦149.8cm、横171.2cmの絹本着色の大幅で、真紅の牡丹に囲まれた光明を放つ人物を濃彩で描く。自筆の箱書き、出品目録と批評から、本図が第1回主潮社展出品作の《降魔圖》と分かる。奈良時代以来多くの降魔成道図が描かれ、近代でも降魔を画題とした作品は複数見られるが、本図は魔衆を真紅の牡丹に喩え、釈迦を現代人物として描く点で特異である。橋村の出品作中、濃彩を用いた最初期の作例であり、水墨山水にはなかった色彩の研究の成果を示したものと考えられる。同年制作の山水画にはその応用を試みた跡が認められ、以後の着色画の先駆的作例とも位置づけられる。また、顔貌や肉身の陰影表現からは、写実の研究も試みていることが分かる。写実への興味は、以後大正期を通じて確認できるが、本図における写実表現は西洋画に加えて明清画を参照しているのではないか。

本図は橋村の画風転換の起点となった作品の一つと評価でき、以降の作品も併せて考察すると、本図のような様々な実験を経て、大正8、9年頃から中国絵画学習への志向を強めていったと考えられる。その意味において本図は、橋村の画風転換の過程を具体的に提示するとともに、保守的南画家として語られがちであった橋村の革新的な一面を示す作例である。